

## 1. 資料名

『諸家<sup>せきとく</sup>尺牘』三巻

## 2. 収集形態

購入(210 万円 税込)

## 3. 内容

1. 徳田彦六(伊予新谷藩〈大洲藩支藩〉家老。中江藤樹門下。)に宛てられた儒家の書簡 47 通および詠草・書目・その他断簡・別人宛書簡など 4 点。
2. 書簡の差出人は 18 世紀前半の新谷・大洲の学問状況を反映した錚々たる顔ぶれで、陽明学派の三輪執斎(1669～1744)とその高弟である川田雄琴(1684～1760)、朱子学派の三宅尚斎(1662～1741)とその弟子多田東溪(1702～1764)、そして懐徳堂第 2 代学主の中井登庵(1693～1758)らの名が確認できる。このうち、川田雄琴は執斎の推薦により大洲藩主加藤泰温の儒臣となり、のちに藩校止善書院明倫堂の教授となった。また、多田東溪も一時、新谷藩江戸藩邸講師となっている。なお、中井登庵は、16 才から数年間、新谷藩大坂留守居役岸田源之進の養子となっていたことがあり、これが徳田彦六との交友に繋がったものと推測される。
3. 本資料が懐徳堂研究において重要性を持つのは、主に(1)中井登庵筆(享保十一年)十月九日付書簡、(2)中井登庵筆(年代不明)九日付書簡に拠る。(1)は、懐徳堂が官許を得たことを記念して行われた三宅石庵の開講講義の 4 日後に書かれたもので、懐徳堂関係者の喜びを生々しく伝えるほか、「開講生徒百余人」「講堂三十畳」などの記載が見え、開校時の生徒数や校舎の規模を具体的に伝える殆ど唯一の資料である。(2)は儒式の喪祭を实践するにあたっての具体的な手引きの一部を記したものであるが、懐徳堂学派の重要な関心の一つである儒式喪祭礼の日本的受容という問題を考えるうえで、興味深い資料である。今後、大阪大学懐徳堂文庫に所蔵されている、歴代学主中井家の葬儀記録「襄事録」や、中井登庵の主著『喪祭私説』と対照することにより、この分野の研究進展に資することが期待される。